

一般大衆における仏教信仰の一側面  
—天台宗寺院における写経からみえるもの—

中尾将大（大阪大谷大学 非常勤講師）

はじめに

① 多様化する現代社会

- ・現代社会は多分に整備され、現代人は社会生活を行う上で多くの資材や手段、選択筋に恵まれている
- ・そのような環境下で現代人は自己の目標実現に向けて努力している＝環境への適応（就職活動、ボランティア活動、日々の労働、婚活）

しかし・・・

- ・常に自己の思い通りに事が運ぶわけではない

→事態が打開されない状態が長引くと最悪の場合、うつ、自殺、他者や社会への攻撃行動へ

- ・事態の回避の可能性の一つとして、「仏のとの対話、交流（コミュニケーション）」があるのではないか？

例）座禅、念仏、写経、仏閣への参拝など・・・

- ・自己を非日常的環境（人里離れた寺院）に置き、自らを見つめ、神仏と対話する（天台小止観 摩可止観）

→仏像と向き合い、手を合わせる行為に象徴

- ・写経を通じ、自分の力ではどうにもならない事象を私の思量を超えた存在に託すことで精神的安寧を得ようとする（無量寿経）

○ 本発表ではある天台宗寺院における一般参拝客にみられる写経を通じて一般大衆における信仰の1側面について考察を加えることを目的とした

②写経とは

- ・まだ印刷技術がなかった時代に僧侶達が教えを学ぶためにひとつの教典を自分で書き写すことであった
- ・または熱心な信仰心を具体的な形にすることでもあった
- ・写経を年単位で継続することで心理的効果がみられることがわかっている（中尾・井上,2009,2010）

→人間関係の改善、精神的安定の獲得、苦悩の解決

方法

- ・調査日：2009年3月1日 14時～15時
- ・調査場所：京都市左京区大原にある天台宗寺院 魚山 来迎院
- ・寺院の環境

- ・ 三千院となりの細い山道を登ったところにひっそりとたたずむ
- ・ 寺院名を示す看板がなければ誰も気が付かない人里離れた寺院
- ・ 本堂には平安時代末期の薬師三尊像が安置→神秘的な雰囲気
- ・ 都会の喧騒を離れた別天地で、緑に囲まれ、ひんやりとした空気が漂う

→ 参拝者にとって「非日常的空間」といえる

- ・ 調査対象者：2008年1月から2009年2月までに来迎院にて写経をされた方々33名（男性9名、女性24名 年齢は不詳）
- ・ 出身地の解析対象者：2001年1月から2009年2月までに来迎院にて写経をされた方々214名（男性67名、女性147名 年齢は不詳）であった
- ・ 調査方法：写経そのものを拝見し、最後に書かれてある写経日、願い事、性別を記述した。合わせて、写経者の記帳本を元に彼らの在住している都道府県を特定し、男女別に人数を計測した

### 結果

- ・ 図1は2001年から2009年2月まで来迎院にて写経を行った人々の出身地を示したものである
- ・ 合計214名の方が写経を行ったが、関東地方と関西地方から来られた方がそれぞれ全体の35%(75名)を占め、最も多かった

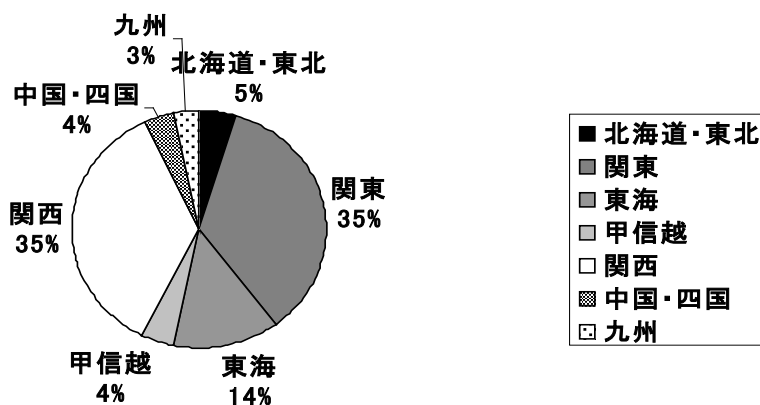


図1. 写経を行った人の出身地別割合 (%)

- ・ 図2は2008年度の写経を行った人々の月別の人数の変動をしめす。縦軸は人数、横軸は月を示す
  - ・ 3,4,5月にかけて写経者の数は増大し、7月から8月にかけて、また、9月から10月にかけて増加傾向を示している
- 行楽シーズンと重なっており、行楽に来た人々がお寺の拝観後に写経を行っていたものと考えられる

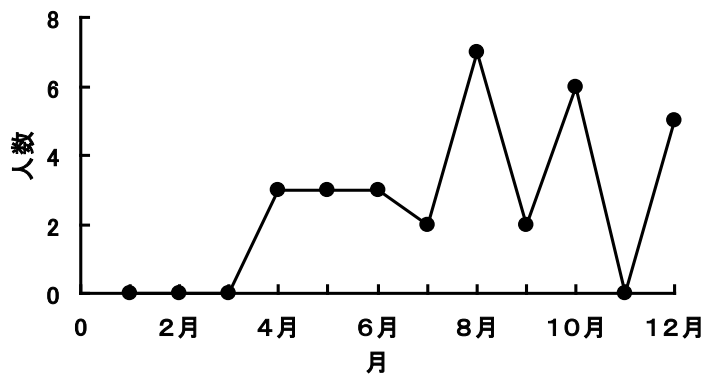


図2. 2008年に来迎院にて写経を行った人の月別の変動（人数）

- ・ 図3は写経の最後に書かれた願い事の分類結果を示す
- ・ 一番多かったのは「心願成就」であった。続いて「家内安全」と「先祖供養」が続く
- ・ 示された「願い事」は人間の努力だけで完全に解決できるものとは言いきれないのではないか

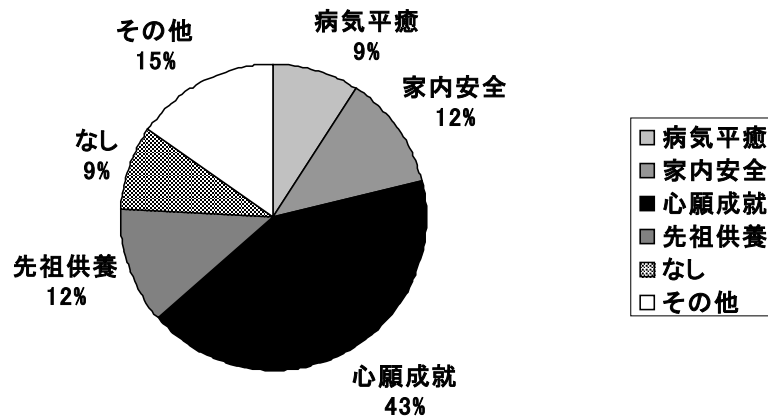


図3. 2008年に来迎院にて写経を行った人の願い事の分類（%）

## 考察

・写経に向かう参拝者の姿・行動

①日常生活（都会生活）



②人里離れた寺院（非日常的な空間に身を置く）←



③自己と苦悩を客観視



④自己の至らなさや欠点あるいは問題の意味に気づく

⑧（？リピーター）



⑤写経に思いを託して、苦悩や問題の解決を願う



⑥苦悩や問題に対して積極的になる



①日常生活に戻る

⑦新たな苦悩・問題の発生

\*都心部で便利で快適な生活を行っている方々が「寺院」という非日常的環境に身を置き、  
悩みや自分を客観視し、その意味を見出す

→それがそのまま「仏からの呼びかけ」となるのでは？＝人生からの問いかけ

・自分に降りかかった災難や苦悩の意味を見出すことができた＝「仏の智慧の働き」、「救いの働き」を感じられているのかもしれない

・参拝者は今後の取り組みを決意しつつ、「悩みや苦の解決」という願いを託して写経を行うことだろう

・彼らは精神的安寧を得て、また日常の環境に戻る

→以前よりも日常生活や抱える苦悩に対してより積極的に取り組めるようになるのでは？

・人間は生きていくと新たな苦悩や問題と出会う

→そのときはまた、仏のとの交流の機会を持ち、問題解決への努力をする

\*躓きながらも一歩、また一歩と変化していくのが「人間の成長」ではないだろうか

・苦悩は人間的成長の種となる＝「煩惱即菩提」

\*参拝者は写経をしたからといって直ちに願いがかなったり、  
苦悩が解決したりするとは思っていないのではないかと（解決に向けてのきっかけ）

→仏の救いの働きが「現代人の人生を後押しする」ということになるのではないかと

- ・考察の冒頭で示した「仏との対話」を繰り返すうちに・・・  
→最終的には仏の智慧の働きに全てを託して、あるがままに生きることが出来るようになり、自ずと苦悩が解決され、人は苦しみから解放され、真に幸福な人生を歩めるのではないか？  
(浄土真宗における「自然法爾（じねんほうに）」の境地では？)

#### 引用文献

- 中尾将大・井上徹（2009）日本人における「写経行動」に関する調査的研究(1) 大阪大谷大学紀要 **43**, 71-81
- 中尾将大・井上徹（2010）日本人における「写経行動」に関する調査的研究(2)－写経歴の長短による行動パターンの比較－ 大阪大谷大学紀要 **44**, 161-170

#### 参考文献

- 藤 能成（2010）救われるということ その人を憶ひて りゅうこくブックス **122**, 49-93
- 黒木 賢一（2011）歩き遍路は心理療法 日本仏教心理学会誌 **2**, 94-98
- 中尾 将大（2011）日本人における写経行動にまつわるフィールドワーク研究－「願い事」にみられるパートタイム写経者の行動パターン－ 日本仏教心理学会誌 **1**,131-140
- 恩田 彰（2010）仏教の祈りと慈悲の瞑想 日本仏教心理学会誌 **1**,158-160